

「体育会所属大学生の学生生活と進路形成に関するアンケート」報告

—関東地区のラグビー部とアメリカンフットボール部を事例に—

西島 央

A Report on “The Questionnaire on the Students’ School Life and Career Formation who belong to Athletic Club Activities in Universities”

—Based on a Survey to the Rugby Clubs and American Football Clubs in Kanto Area—

HIROSHI NISHIJIMA

1. はじめに

(1) 調査研究にあたって

2008 年度から始まった「教育社会学演習」では、担当教員である西島が取得している科学研究費基盤研究 B「中等教育における部活動指導の実態と教科・進路指導への効果に関する臨床教育学的研究」で取り組んでいる調査研究に関連づけながら、受講学生に調査の一部に参加させるかたちで質問紙調査に取り組ませている。

2011 年度は、中等教育における進路指導のあり方を見直す作業の一環として、中高時代の運動部活動を経てその成果をもとに大学に進学した体育会所属大学生の学生生活と進路形成の実態を把握することを目的に、質問紙調査を設計した。本稿は、その調査の報告レポートである。

(2) 本研究の目的とその背景

本研究は、関東圏の私立大学のラグビー部とアメリカンフットボール部（以

下、アメフトと表記)に所属する学生を対象に行った質問紙調査をもとに、「体育会所属大学生」の学生生活と進路形成の特徴と課題に関して、教育社会学的な視点から考察することを目的とする。

一般に「体育会所属大学生は就職がいい」などと言われるが、それは本当だろうか。

私たちが「体育会」と言うとき、そこでイメージしているのは、テレビや新聞等で試合結果が報道される、東京六大学野球やラグビー等のメジャー競技種目の大学選手権大会に出場している大学のチームや選手たちではないだろうか。そのイメージからなら、たしかに「有名大学に通っていてスポーツもできるなら、就職がよくても当たり前だ」と納得してしまいそうになる。

しかし、実際には、大学にさまざまな学部や入試難易度の違い、伝統や校風の違いがあるように、体育会にも強い部や弱い部、メジャー競技種目やマイナー競技種目があり、また全国レベルで注目される試合に出場する選手もいれば、強豪チームに所属していても一度も試合に出場したことのない選手や、試合結果が報道されることのない下部リーグで試合に出場している選手もいるというように、体育会所属大学生は一枚岩的に捉えられるものではないはずだ。

そのように多様な様相を呈する体育会所属大学生の特徴と課題を明らかにするにあたって参考とすべき高等教育の先行研究では、大学生の学生生活や進路形成や社会的評価に関する調査研究が数多くみられる。しかしながら、その多くが、学部や入試難易度や伝統の違いなどに注目した調査研究であり、体育会活動に注目した研究は、管見のかぎり非常に少ない。

数少ないなかでは、武内清を代表とする研究グループによる一連の大学生対象の調査研究が挙げられよう(武内編 2003、武内 2010、武内 2011 など)。彼らは、体育会活動やサークル活動が学生の大学生活でどのような比重を占め、どのような効果をもたらしているのかを考察している。また平沢(1995)、梅崎(2004)、松繁(2005)、徳田(2011)などは、体育会所属大学生の社会的評価として、規律正しさや上下関係の取り方、目標に向かって努力する姿勢が身につけていることなどの人的資本、先輩後輩関係のような人的ネットワークをもっていることなどの社会関係資本、就職活動の面接の際に公式戦の経験談などが人

物アピールとして有利に働く面接印象といった要因を挙げて、体育会活動や運動系サークル活動と就職との関係を肯定的に論じている。

だが、それらの研究はいずれも「体育会」または「部・サークル」といった所属の有無程度の括りで、体育会活動やサークル活動が学生生活や進路形成や社会的評価に与える効果を論じる程度に留まっている。そのため、上述した体育会の多様な様相や活動のスループットをふまえていることはなく、また広く大学生調査として行っているため、体育会所属大学生を一定規模で捉えることもできていない。結果として、体育会活動の何がどのような理由でどのような効果をもっているかということ、そしてそもそも「体育会」という言葉からイメージされる特徴を彼ら／彼女らだけが体育会活動を通して身につけたかどうかということを検証できてきたとは言い難いのである。

体育会所属大学生はこれまで、実感として一般の大学生より学生生活が充実しているように見えたり、就職がよいように思われたりしていたことは否めない。だから研究の俎上に載せなくてもよかったかもしれない。しかし、大学生の就職難の状況が続き、大学生の学力や卒業後の進路に対する大学教育のレリバンスが社会的に問われるようになってきた昨今、体育会所属大学生ばかりが以前と変わらない状況にあり続けられているわけではない。練習時間帯を授業時間帯とずらして、授業に出席することが求められるようになったり、競技団体レベルで所属大学生の就職をサポートする取り組みをしたりするケースがみられるようになってきている。

このような現状をふまえたとき、体育会所属大学生の学生生活や進路形成や社会的評価についても、その特徴と課題を明らかにし、課題解決に資する調査研究が求められよう。

また、筆者を含む研究グループ（中等教育研究会）は、これまで中等教育段階の部活動に注目して、その学校生活や進路形成に果たす役割や課題などを明らかにしてきた。大学の体育会活動に、中等教育段階の部活動と同様のまたは異なる役割や課題などの特徴があるかどうかを明らかにすることは、中等教育段階の学校生活で学業と並んで大きな比重を占める部活動の意義やあり方、顧問教師による進路指導のあり方を考えていくうえでも重要な意味がある。

以上のような問題関心から、体育会所属大学生の多様な様相を捉えることを企図した質問紙調査を実施した。

(3) 調査の概要(図表 1)

体育会所属大学生は、特定の学部や入試難易度の学生を捉えるように簡単には捕捉できない。また、競技特性や部の特性に大きく左右されてしまう。そこで、特徴を捉えやすくするために、i. 基本的に男性のみの競技種目、ii. 大学の体育会に所属することが競技キャリアとして重要な競技種目の2点で条件を絞り、ラグビー部とアメフト部を調査対象とした。

日本ラグビー協会と共同で、また関東学生アメリカンフットボール連盟の協力を得て、下記の要領で、質問紙調査を実施した。

①調査対象：ラグビー部は、関東大学リーグ戦グループに所属する私立大学。アメフト部は、関東学生アメリカンフットボール連盟に所属する私立大学。リーグの上位、中位、下位でチームのレベルを3分類した。具体的には、ラグビー、アメフトともに調査実施時の4年生が1年時に、1部、2部、3部以下の3つに分類した。各分類から1年生と4年生の選手登録の部員各100人程度をサンプルに設定できるように大学を選んだ。なお、選手対象の質問紙調査の他に、部の活動実態を確認するための、主務対象の質問紙調査も実施した。

②調査期間：2011年11月24日から2012年1月19日まで。ただし回収状況をふまえて、シーズンオフ明けまで期間を延長した。そのため、大学によっては、4年生票が欠けている場合がある。

③調査方法：ラグビー部は各大学の主務宛に郵送、アメフト部は連盟の会議日に主務に手渡しし、いずれも郵送で回収した。

④配布数と回収率：ラグビー部は配布数781票(30校)、回収数379票(15校)、回収率48.5%。アメフト部は配布数808票(36校)、回収数484票(29校)、回収率59.9%。

2. 学生生活と進路形成に関する主な調査結果

体育会所属大学生に限定した調査研究がこれまでほとんどなかったことから、

社会的評価を身につけているかどうかの検証は他稿を期すこととして、本研究では、とくに所属チームのレベル、彼ら自身の入学方法、公式戦出場状況の違いに注目しながら、記述的に彼らの学生生活と進路形成の多様な様相を描き、教育社会学の視点から捉えられる特徴を示していくことにしたい。なお、回収された票は、学年やレベルでその回収数に大きな偏りがあるため、集団間の差に統計的に有意な差があるかどうか検定をするのには適していない。そこで記述統計のみを示すこととする。

(1) 高校までの同競技経験の状況(図表 2～4)

同じ体育会活動をしているといっても、高校までの行動経験、つまり競技歴に違いがあり、その違いが何かに影響しているかもしれない。そこで高校までに同じ競技をした経験があるかどうかを確認してみよう。

図表 2 のように、高校までに同競技を経験していない割合は、ラグビー＝5.6%に対してアメフト＝48.6%と、ラグビーのほうが高校までの同競技経験がはるかに高い。とくに、小・中・高とずっと同じ競技を経験してきている割合は、アメフト＝7.7%に対してラグビーでは 36.5%にもなる。また、図表 3、4 のように、レベル別にみると、同競技経験無しの割合や高校時同競技経験の割合は、アメフトでは上位と下位の間に約 50 ポイントもの大きな差があり、大半が同競技を経験しているラグビーでも上位と下位の間に 10 ポイント弱の差がみられる。ラグビーとアメフトの間のこのような違いは、高校までの部活動数の違い(例えば 2012 年度は、全国でラグビーが 1108 校、アメフトが 117 校)を反映しているものと考えられる。

(2) 大学への入学方法(図表 5～6)

一般の大学生でも入学方法の違いと学業との関係が検討されているが、体育会所属大学生も、入学方法の違いが体育会活動や他の学生生活に関係しているかもしれない。そこで体育会所属大学生の入学方法を図表 5、6 から確認してみよう。一般入試とスポーツ・体育推薦に絞ってレベル別に示すと、次のとおりである。

一般入試：ラグビー上位＝5.6%、ラグビー中位＝2.9%、ラグビー下位＝16.9%、アメフト上位＝18.9%、アメフト中位＝34.9%、アメフト下位＝54.6%。

スポーツ・体育推薦：ラグビー上位＝52.3%、ラグビー中位＝81.6%、ラグビー下位＝39.0%、アメフト上位＝52.0%、アメフト中位＝38.8%、アメフト下位＝3.8%。

この数値から、入学方法には競技種目による違いとレベルによる違いがみられることがわかる。加えて、第一に、図表 5 からは、ラグビーでは中位や下位の大学でもスポーツ・体育推薦が大きな割合を占めていること、第二に、高校入学方法と大学入学方法を組み合わせてみた図表 6 からは、ラグビーでは、高校、大学ともにスポーツ・体育推薦、つまり主に部活動の実績によって学校段階を上げる選抜を受けてきている学生が 31.2%にものぼっていることがわかる。これらは、体育会所属大学生の学歴達成の特徴的なあり方として注目できるだろう。

(3) 授業への関わり(図表 7～10)

前述のとおり、体育会所属大学生もしっかり学習することが求められるようになってきているが、彼らの授業への関わり方はどうなっているのだろうか。授業の出席率は、図表 7、8 のように、半数程度が 81%以上、つまり 1 学期に 12～3 回は出席しており、アメフト上位＝32.2%が他より 20 ポイントほど低い以外は、レベルや入学方法による違いはあまりみられない。強豪チームだからとかスポーツ・体育推薦だからといった理由で授業に出なくてもかまわないという状況ではないことがわかる。

しかし、「授業についていけている」かどうか尋ねたところ、図表 9 のように、「とてもついていける」「まあついていける」の和は、ラグビー一般入試＝84.0%、ラグビースポーツ・体育推薦＝56.0%、アメフト一般入試＝75.7%、アメフトスポーツ・体育推薦＝52.9%、と、肯定的な回答の割合は、ラグビー、アメフトともに、一般入試の学生よりスポーツ・体育推薦の学生のほうが 20～30 ポイントほど低かった。授業には同じように出席していても、一般入試の学生に比べてスポーツ・体育推薦の学生は、その授業についていけない傾向にある

といえるだろう。

では、授業に関する範囲での学習時間に差があるのだろうか。予復習など授業に関する1週間あたりの学習時間を尋ねたところ、図表10のように、1時間未満の割合は、ラグビー一般入試＝52.0%、ラグビースポーツ・体育推薦＝72.6%、アメフト一般入試＝50.3%、アメフトスポーツ・体育推薦＝59.2%、と、ラグビー、アメフトともに、一般入試の学生に比べてスポーツ・体育推薦の学生のほうが学習時間は短い。とはいえ、そもそも一般入試の学生であっても半数が1週間に1時間未満の学習時間なので、予復習などの時間の差で授業内容の理解に差がついているとはいえないだろう。

このことから、一般入試の学生とスポーツ・体育推薦の学生の間には高校までの学力達成に差があり、それが大学の授業内容の理解の差にもつながっている可能性を示唆できるのではないだろうか。

(4) 体育会活動への関わり(図表11～17)

体育会所属大学生の体育会活動そのものへの関わり方に、競技種目やレベルや入学方法の違いなどによる差異はみられるのだろうか。また、体育会活動や学生生活全般への満足度はどうだろうか。

まず、体育会だからといって、毎日練習をしているわけではない。主務対象の調査で確認した練習日数を図表11でみると、上位ではほとんど週6日練習しているが、ラグビーでは下位の半数が、アメフトでは中位と下位の大半が週3～5日の練習にとどまっている。つまり、練習日数はレベルによってやや異なり、下位に下がるにつれて練習日数も少なくなる傾向にあるということだ。

練習にも全員が毎日参加しているわけではない。図表12のように、練習参加率81%以上、つまり、週5～6日の練習に1日休むことがあるかどうかくらいきちんと参加している割合は8割前後だ。レベルにより若干のばらつきがみられるが、上位ほど参加率が高いわけではなく、ラグビー、アメフトともに中位の参加率が高くなっている。ただし、これはレベルによる違いというよりは、チームの方針による違いと思われる。

学校教育活動の一環に位置づき、高い割合の加入状況にある中学校や高校の

部活動では、試合やコンクールに出ることはもちろん大切ながら、日頃の活動を楽しみにしている部員も少なからずいる。だが、大学の体育会であれば、なにより公式戦に出場することが最大の目標であり楽しみであろう。そこで4年生¹⁾の公式戦出場状況を図表13からみてみると、ラグビーよりアメフトのほうが試合に出場している割合が高く、ラグビーでは2割の部員に試合出場がないのに対して、アメフトでは半数が全試合フル出場している。さらに詳しく、図表14から入学方法別にみてみると、スポーツ・体育推薦の学生で「何試合かの交代出場」または「出場無し」とどまるのは、アメフトでは2割にすぎないが、ラグビーでは3分の2にものぼっている。

念のため、部内での実力レベルを確認してみたところ、図表15のように、「上のほう」はラグビー＝14.6%、アメフト＝22.0%、また「下と中の間」「下のほう」の和はラグビー＝30.4%、アメフト＝13.6%である。ラグビーのスポーツ・体育推薦の学生がアメフトの当該学生と比較して極端に実力レベルに劣る分布をしているわけではない。ラグビーのほうが試合出場できる割合が低いのは、部員数やレギュラーポジション数の違いからと思われる。

では、このような関わり方をしている体育会所属大学生の体育会活動や学生生活全般に対する満足度はどうなっているのだろうか。体育会活動を終えた4年生のみを対象に、体育会活動に対する満足度を図表16から公式戦出場状況別にみてみよう。「とても満足」の割合は、ラグビーでは「フル出場」や「交代出場」が70%弱なのに対して「出場無し」は20%強と、試合に出ている部員と出ていない部員との間に50ポイント近い差がある。一方、アメフトでは「フル出場」や「交代出場」が50%弱なのに対して「何試合かの交代出場」や「出場無し」は35%強と、公式戦出場状況別による満足度の違いは10ポイントほどにとどまっている。

続いて学生生活に対する満足度を図表17から公式戦出場状況別にみてみよう。「とても満足」の割合は、ラグビーでは「フル出場」や「交代出場」が30%前後なのに対して「何試合かの交代出場」や「出場無し」は10%強と、公式戦出場状況別による満足度の違いは10ポイントほどみられる。一方、アメフトで

は実数の少ない「出場なし」を除けばいずれも 20%台である。

ラグビーでは、大学にスポーツ・体育推薦で入学したものの公式戦に出場することなく 4 年間が終わる学生が一定数いることが、このような満足度の散らばりにつながっていると考えられるのではないだろうか。

(5) 卒業後の進路(図表 18～21)

中学校、高校、大学で行ってきたスポーツ活動の卒業後への継続は、福祉的な観点からも国家的な課題となっているし、個人レベルでは進路形成の問題としても重要である。そこで 4 年生に対して卒業後の競技継続意志を尋ねた。図表 18 からレベル別にみてみよう。卒業後も選手として同競技を続けたいと考えているのは、ラグビー上位=30.2%、アメフト上位=22.7%で、中位や下位になると少しずつその割合が下がっている。指導者を希望したり趣味として継続したりしたいと考えている割合まで含めると、ラグビーでは「趣味で継続」でレベルによって大きく異なっているが 5～7 割程度、アメフトではどのレベルでも 5 割ほどである。

続いて図表 19 から入学方法別にみてみよう。卒業後も選手として同競技を続けたいと考えているのは、ラグビー一般入試=23.1%、ラグビースポーツ・体育推薦=27.8%、アメフト一般入試=17.0%、アメフトスポーツ・体育推薦=22.0%と、ラグビー、アメフトともに、一般入試かスポーツ・体育推薦かによる競技継続意思の違いはほとんどみられない。とくに注目しておきたいのは、スポーツ・体育推薦の学生で「選手継続」の割合が 2 割台にとどまっていることである。スポーツは学歴達成のための手段であり、職業選択にまでは直接つなげて考えていないのか、または職業選択の段階までくると、かなりの割合でスポーツによる地位達成をあきらめなくてはいけない構造なのか、その背景を探っていく必要があるだろう。

また、指導者を希望したり趣味として継続したりしたいと考えている割合まで含めても、ラグビー、アメフトともに入学方法別による違いはほとんどみられない。ラグビーとアメフトとで大きく異なるのは「趣味で継続」の割合で、ラグビーは 4 割近くにのぼるのに対してアメフトは 2 割と、ラグビーの半分し

かない。ただし、この背景には成人を対象とした生涯スポーツでの受け皿の多寡の問題がありそうだ。

以上から、個人の意思によるものか構造上の問題かはわからないものの、体育会所属大学生も大学卒業後に選手としてその競技を続ける進路を希望しているばかりではないといえよう。では、彼らはどのような進路に進んでいくのだろうか。調査時点(12月～1月)の4年生の卒業後の進路決定状況を図表20、21からみてみよう。

まず図表20からレベル別にみると、「民間内定」と「その他内定」を合わせてなんらかの就職先の内定を得ている割合は、どのレベルでも60%～70%台前半と、ほぼ同程度である。強豪チームに所属しているからといって内定率が高いわけではないことがわかる。民間企業への内定は、最も高いアメフト中位＝64.2%から最も低いアメフト上位＝40.0%までやや幅がある。民間企業に絞っても、強豪チームほど内定が取れるというようなことはない。加えてとくに目につくのは、ラグビー上位で未定が4分の1、アメフトではどのレベルでも留年が1割前後いること、そしてラグビーもアメフトも、留年と未定を合わせて2～3割にのぼっていることである。例えば厚労省の「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」などは調査時期が一時点ごとの調査を重ねて推移をみているので直接比較はできないが、12月～2月頃に大学生全体で2～3割の進路未定者がいる。進路未定者の割合は、一般の大学生と体育会所属大学生とでそう大きく変わるものではないかもしれない。ただし、体育会所属大学生の、とくにアメフトで留年者が多いことをどう考えるか、進路未定者は本人の意思で未定なのか構造上の問題なのかを、今後検討していく必要があるだろう。

続いて図表21から入学方法別にみてみよう。ラグビーの一般入試とスポーツ・体育推薦で大きく異なる点は、民間内定の割合が一般入試＝69.2%に対してスポーツ・体育推薦＝51.1%と、20ポイント近く一般入試のほうが多いことと、進路未定者の割合が一般入試＝7.7%に対してスポーツ・体育推薦＝22.2%と、逆に15ポイントほどスポーツ・体育推薦が多いことである。一方、アメフトの一般入試とスポーツ・体育推薦で異なる点は、民間内定の割合が一般入試

＝55.1%に対してスポーツ・体育推薦＝44.8%と、10ポイントほど一般入試のほうが多いことと、逆にその他の内定の割合はスポーツ・体育推薦のほうに10ポイントほど多いことである。また、ラグビーとアメフトとの違いとして興味深いのが、留年と未定の割合だ。つまり、ラグビーはスポーツ・体育推薦の進路未定者がめだつが、アメフトは、内訳にやや差があるものの、一般入試もスポーツ・体育推薦も同様に3割弱が留年または未定である。以上のように多様な進路状況の要因が、競技種目の特徴なのか入学方法の特徴なのかを見極めていく必要があるだろう。

(6) 就職活動に対する評価(図表 22～25)

最後に、「体育会所属大学生は就職がいい」と言われていることに関して少し検討してみたい。民間企業に内定した学生に対して就職活動に対する評価を尋ねた。

まず、図表 22 のように、民間企業の同競技部のスカウトによって内定を得た割合はラグビー上位＝32.7%(52人中17人)、アメフト上位＝16.7%(24人中4人)である。図表には示していないが、アメフトとラグビーを合わせて4年生361人中、民間企業の部のスカウトによって内定を得て、就職先でも競技を続けられる者は29人、またスポーツ・体育推薦で大学に入学した学生149人中、13人であった。このことから、もし仮に「体育会所属大学生は就職がいい」と言われることが本当であったとして、それは企業の部に入部することで就職できたという理由、つまりスポーツによる直接的な職業達成ではないといえそう

だ。

そこで、内定を得るうえで「所属大学の社会的評価」「大学での成績内容」「体育会での活動」など7項目を挙げて、何がどの程度(「内定の決め手」「足切りや1次選抜」「参考程度」「無関係」)評価されたと思っているかを尋ねた。上記3項目について「内定の決め手」になったと思っている割合をレベル別、入学方法別、公式戦出場状況別に図表 23～25 にまとめた。ケース数が少ないため、統計的な判断を下すことに留保が求められるが、全体の傾向として、「所属大学の社会的評価(大学)」は10～20%台、「大学での成績内容(成績)」は10%前

後なのに対して、「体育会での活動（体育会）」は40～70%台と非常に高い割合にのぼっている。体育会所属大学生たちが、自分の所属大学の社会的評価や自分の学業成績よりも体育会活動をしていることのほうが内定の決め手となっていると考えているということはいえるだろう。

図表 23 からレベル別にみると、ラグビーではレベルが高いほど「所属大学の社会的評価」「大学での成績内容」「体育会での活動」のいずれも内定の決め手になったと評価しており、アメフトではレベルによる違いはあまりみられない。図表 24 の入学方法別は、一般入試とスポーツ・体育推薦の間にめだった差があるとはいにくい。図表 25 の公式戦出場状況別は、「体育会」が内定の決め手になったかどうかだけを図示した。ラグビーは、「フル出場」=46.7%と低いが、他は70%前後で、出場状況の違いと内定の決め手としての評価の間に関係はなさそうだ。アメフトは、「出場なし」=40.0%から「フル出場」=71.2%まで、公式戦出場状況がよいほど内定の決め手としてより評価しているようだ。

「体育会での活動」が内定の決め手になったかどうかに関する体育会所属大学生の評価は、あくまでこのデータの範囲だが、ラグビーはどのレベルの大学に所属していたかのほうが、アメフトは試合に出場していたかどうかのほうが、内定に影響したと思っているようだ。また、入学方法の違いによる差はみられず、むしろ競技種目の違いによる差のほうがみられるようだ。以上のデータから、「体育会所属大学生は就職がいい」というときの「体育会」が、競技種目やレベルや公式戦出場状況によって多様である可能性があることがうかがえるだろう。

3. 考察と今後の課題

以上、体育会所属大学生の学生生活と進路形成の多様な様相を6点にわたって記述的に分析してきた。これらの分析から得られる知見と考察は、大きく以下の4点に整理できるだろう。

第一に、体育会所属大学生といっても、それは一枚岩的ではなく、競技種目、所属チームのレベル、入学方法、公式戦出場状況などの違いにより、彼らの学生生活と進路形成は多様であることがわかった。

第二に、授業との関係では、スポーツ・体育推薦の学生が一般入試の学生に比べて授業についていけないという、学力の問題があることがわかった。

第三に、体育会活動との関係では、公式戦出場状況の違いに顕著に表れる部内での実力レベルの違いによって、部活動や学生生活の満足度が異なることがわかった。

第四に、進路形成に関しては、まず、大学卒業後の同競技継続意志は全般に低く、また民間企業にスポーツのスカウトで内定した者は非常に少ないことがわかった。次に、民間企業に内定を得るにあたって、体育会活動をしていたことは、所属大学の社会的評価や自分の学業成績よりずっと重要な要因だと考えている。しかし、体育会に所属していればよいのではなく、体育会所属大学生たちは、競技種目、所属チームのレベル、公式戦出場状況の違いによって、「体育会での活動」として評価されている程度を異なって受けとめていることがわかった。

分析にあたって示してきた数値の大小の問題は、現時点では適切な比較対象がないので十分な評価できないが、体育会所属大学生の学生生活や進路形成のあり方を考えるにあたって、以上の知見からは、少なくとも次の2点のことはいえそうだ。

第一に、大学の体育会活動は、高校までの部活動と違い、活動をしているだけで楽しかったり満足度が高かったりということはない可能性がある。体育会活動はまだまだ学生生活のかなりの時間を拘束しているケースが高い状況にあるが、彼らが授業やその他の学生生活を享受する機会をどう保障していくかを考える必要があるだろう。

第二に、スポーツ・体育推薦は、中等教育段階レベルからみれば、生徒の多様な能力を評価して、より上位の学校段階に進む方法の一つとして、例えば家庭環境による教育の格差を是正する働きをもっていると評価できる(西島編著2006)が、高等教育段階レベルからみれば、彼らがより上位の学校段階に進む際に評価されてきた能力を直接評価されて進む卒業後の進路はほとんど保証されていない、いわばどん詰まりの進路形成のルートだったともいえるのだ。

筆者がかつて調査研究の対象としていた東京都内の公立中学校のラグビー部の顧問教師は、その部を関東大会にまで出場させる強豪校に育て、多くの生徒をスポーツ・体育推薦で有名高校に進学させていた。しかし、彼は常々部員たちに「お前たちからラグビーを取ったら、ただのデブだぞ。」とけしかけて、平素からきちんと学習をするように指導していたという。

学生スポーツは、ナショナルチームレベルに向けての競技力向上の役割を担っているし、大学の名誉や経営のためにも有効だ。しかし、それらのためだけに体育会やスポーツ・体育推薦があるわけではない。多様な能力の一つの側面を評価されてスポーツ・体育推薦で入学し、その能力を発揮して体育会活動を行っている体育会所属大学生たちが学生生活を享受し、大学卒業後の進路形成をするといったかたちで教育を受けることを保証することも大切だ。競技力向上、大学経営、そして教育のそれぞれに期待される役割と現状の課題をふまえて、三者のバランスをどのように取っていくことが望ましいのか、検討していく必要があるだろう。

本研究は、ラグビー部とアメリカンフットボール部というわずか2競技種目の体育会活動を事例に、体育会所属大学生の学生生活と進路形成の多様な様相について記述的に整理をしてきた。分析はまだプリミティブなものにとどまるが、A0入試など多様な入試で入学した大学生の学力や進路形成が既に問題になっているように、体育会所属大学生のなかにも「体育会所属大学生は就職がいい」という“体育会神話”が通用しない者がいることがみえてきただろう。

今後は、i. 本調査データのさらなる分析を行うとともに、ii. 他競技にも調査を広げる、iii. 大学レベルを揃えるか1大学に焦点化して競技種目による違いを捉える、iv. A0入試など他の入試によって入学した大学生と比較する、v. 高校までの部活動と大学の体育会活動の役割や効果の共通点と相違点を検証する、などといったかたちで量的質的に調査研究を広げていきたい。それらの調査研究を通して、とくに体育会所属大学生には人的資本、社会関係資本、面接印象といった社会的評価の諸要因が本当に身についているのか、また身につけているとして、競技種目、所属チームのレベル、入学方法、公式戦出場状況などの

違いによってその程度に差があるのかどうかを探りながら、体育会所属大学生がこれまで社会的に評価されてきた諸側面が現実なのか幻想なのかを見定めるべく、体育会所属大学生の学生生活や進路形成や社会的評価の多様な様相をより緻密に把握してその特徴と課題を描いていくことにしたい。

<注>

1) なお、4年生の「ラグビー一般入試」「ラグビー下位」「アメフト出場なし」の回答者が非常に少なく、以下の4年生のみの分析に関しては、統計的には適切な評価ができない状態にあるデータであることに留意する必要がある。

<主要参考文献>

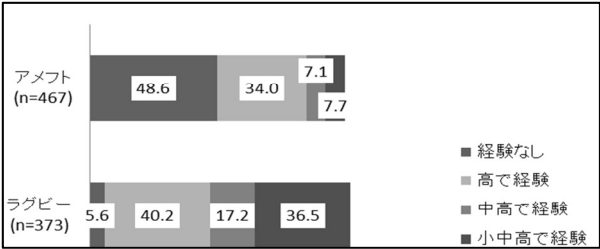
- 平沢和司 1995 「就職内定企業規模の規定メカニズム —大学偏差値とOB訪問を中心に—」 荻谷剛彦編『大学から職業へ —大学生の就職活動と格差形成に関する調査研究—』広島大学大学教育研究センター。
- 松繁寿和 2005 「体育会系の能力」『日本労働研究雑誌』537。
- 西島央編著 2006 『部活動』学事出版。
- 武内清編 2003 『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。
- 武内清（研究代表者） 2010 『大学の「教育力」育成に関する実証的研究 —学生のキャンパスライフからの考察—』科学研究費補助金報告書。
- 武内清 2011 「大学生の学生文化とキャンパスライフをめぐる」『比治山高等教育研究』第4号。
- 徳田政隆 2011 「就職活動における体育会効果の検証」『大学生なう。 —全国の社会科学分野の大学生に関する調査報告書—』東京大学教育学部総合教育科学科比較教育社会学コース。
- 梅崎修 2004 「成績・クラブ活動と就職—新規大卒就職市場におけるOBネットワークの利用」『大学教育効果の実証分析』日本評論社。

※本報告は、平成20～23年度科学研究費補助金「中等教育における部活動指導の実態と、教科、進路指導への効果に関する臨床教育学的研究」の研究成果の

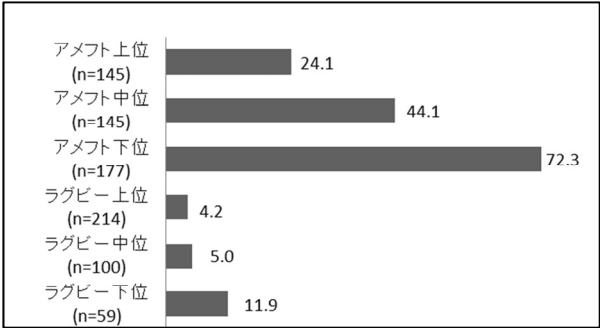
一部である。

図表 1 体育会所属大学生対象質問紙調査のサンプル構成 (人数)

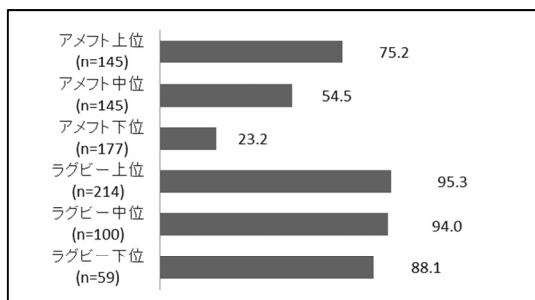
		上位		中位		下位	
		1 年	4 年	1 年	4 年	1 年	4 年
アメフト	対象者数	155	115	169	108	154	107
	回収数	83	66	83	69	111	72
ラグビー	対象者数	165	143	134	104	124	111
	回収数	121	96	64	39	40	19



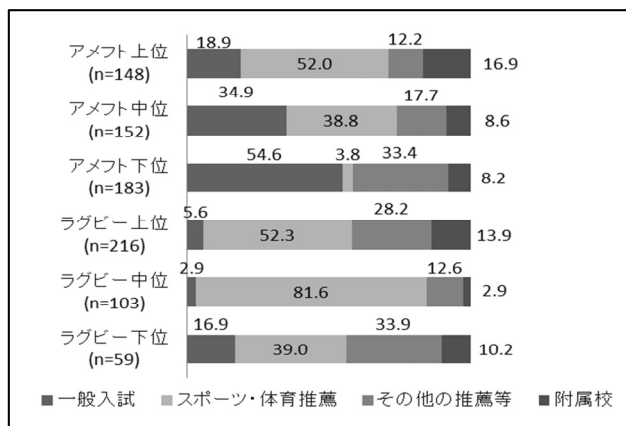
図表 2 同競技経験 (競技種目別) 単位 = (%)



図表 3 同競技経験無しの割合 (レベル別) 単位 = (%)



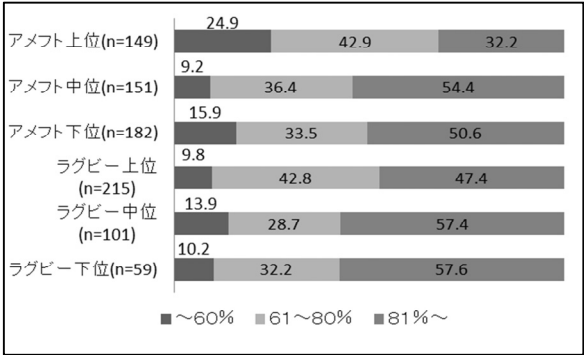
図表4 高校同時競技経験（レベル別） 単位＝（％）



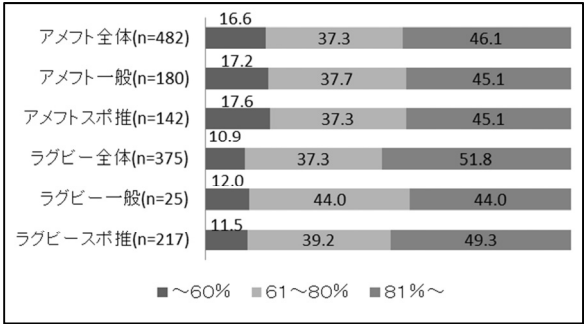
図表5 入学方法（レベル別） 単位＝（％）



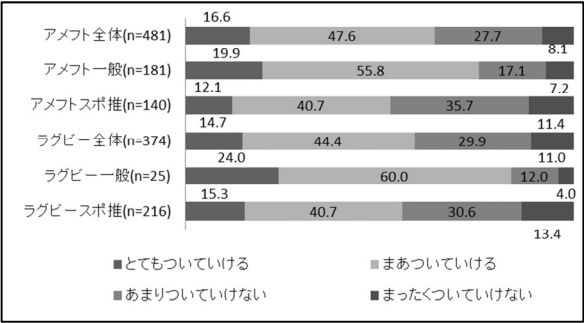
図表6 高校・大学入学方法の組み合わせ（競技種目別） 単位＝（％）



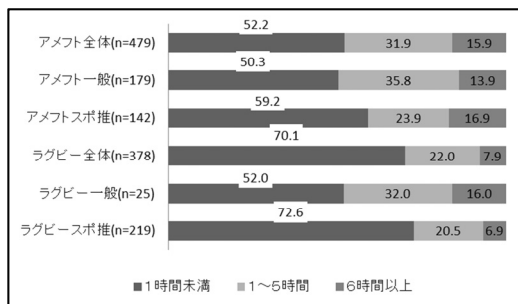
図表 7 授業出席率（レベル別） 単位＝（％）



図表 8 授業出席率（入学方法別） 単位＝（％）



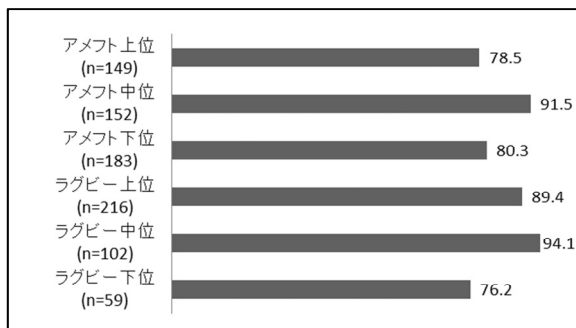
図表 9 授業についていけるかどうか（入学方法別） 単位＝（％）



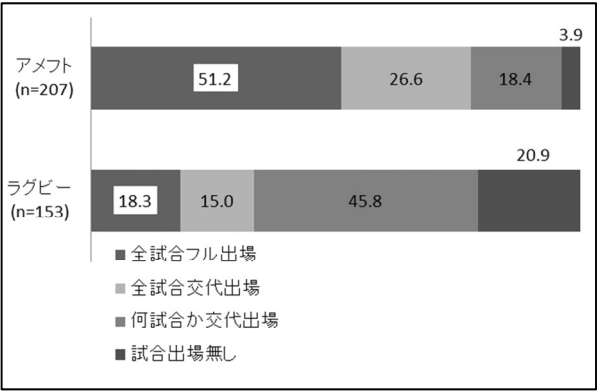
図表 10 1週間あたり授業関係学習時間（入学方法別）単位＝（％）

図表 11 学期中1週間あたり練習日数（レベル別）（校数）

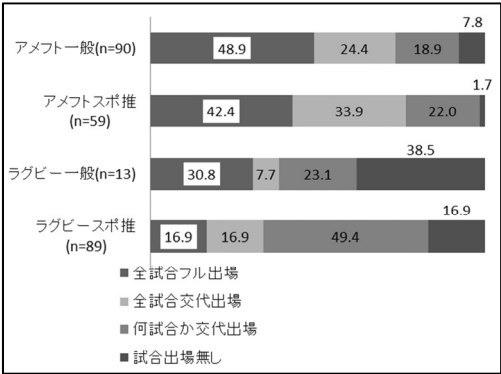
	3日	4日	5日	6日	7日
アメフト上位	0	1	0	6	0
アメフト中位	0	3	3	4	0
アメフト下位	1	1	7	3	0
ラグビー上位	0	0	0	4	1
ラグビー中位	0	0	1	2	1
ラグビー下位	0	0	3	3	0



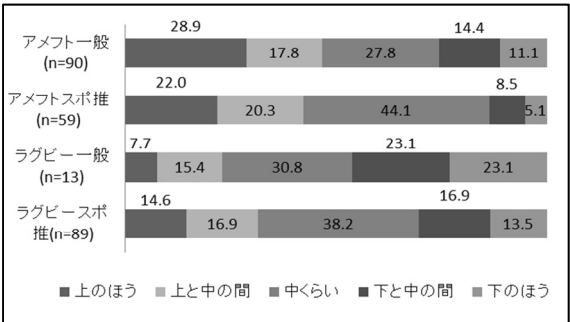
図表 12 練習参加率81%以上の割合（レベル別）単位＝（％）



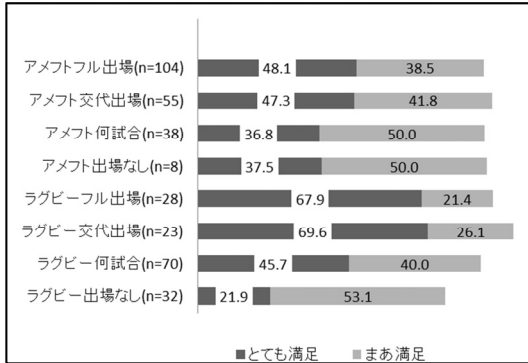
図表 13 4 年生 公式戦出場状況 (競技種目別) 単位＝ (%)



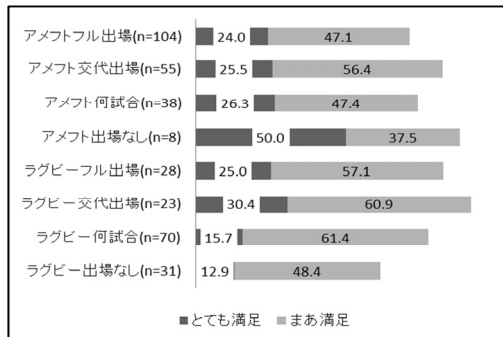
図表 14 4 年生 公式戦出場状況 (入学方法別) 単位＝ (%)



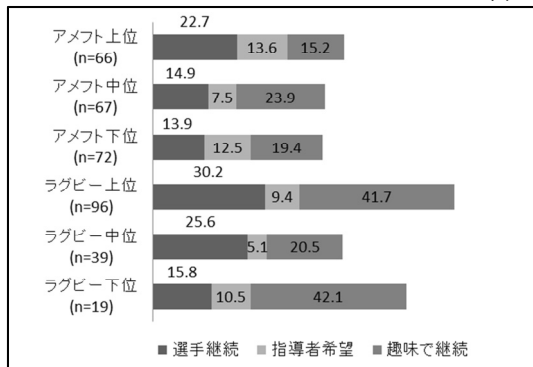
図表 15 4 年生 部内での実力レベルの分布 (入学方法別)
単位＝ (%)



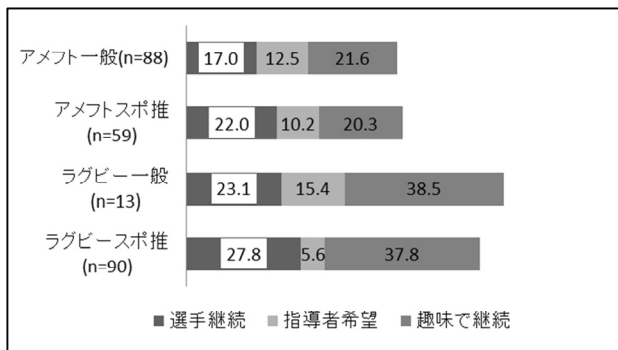
図表 16 4年生 体育会活動満足度 (公式戦出場状況別)
単位 = (%)



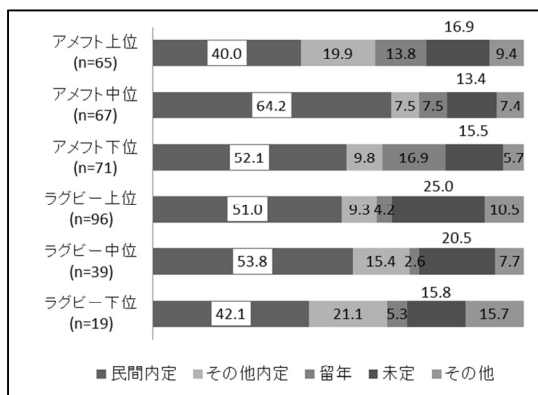
図表 17 4年生 学生生活満足度 (公式戦出場状況別)
単位 = (%)



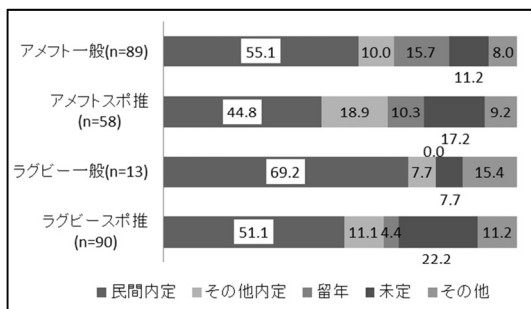
図表 18 4年生 卒業後の競技継続意思 (レベル別) 単位 = (%)



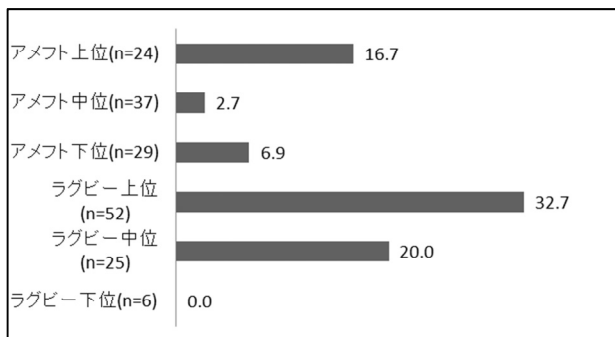
図表 19 4 年生 卒業後の競技継続意思 (入学方法別)
単位 = (%)



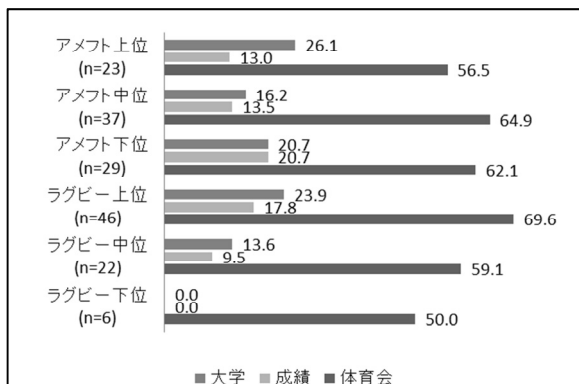
図表 20 4 年生 卒業後進路予定 (レベル別) 単位 = (%)



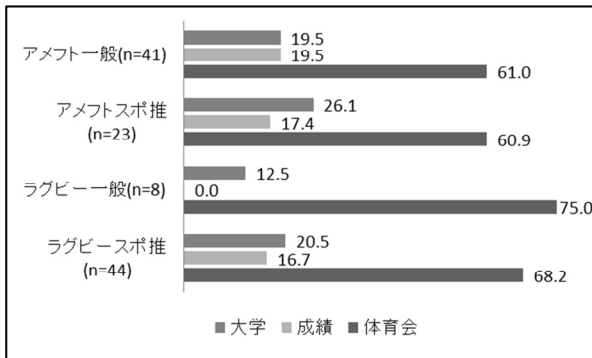
図表 21 4 年生 卒業後進路予定 (入学方法別) 単位 = (%)



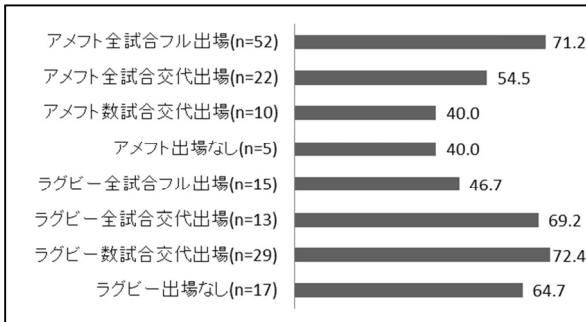
図表 22 4 年生 部のスカウトで内定 (レベル別) 単位 = (%)



図表 23 4 年生 内定の決め手 (レベル別) 単位 = (%)



図表 24 4 年生 内定の決め手 (入学方法別) 単位 = (%)



図表 25 4 年生 内定の決め手 (体育会)
(公式戦出場状況別) 単位 = (%)